

積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の育児支援ニーズ

Study on support for mothers rearing preschoolers in snowy cold region.

前田尚美*	山本八千代*	草野知美*	須藤桃代*
市川正人*	小池伝一*	笹尾あゆみ*	伊織光恵*
関口史絵*	福原朗子**	三田村保***	

Naomi Maeda, Yachiyo Yamamoto, Tomomi Kusano,
Momoyo Sudo, Masato Ichikawa, Tadakazu Koike,
Ayumi Sasao, Mitsue Iori, Fumie Sekiguchi,
Akiko Fukuhara and Tamotsu Mitamura

Abstract

The purpose of this study is to clarify the needs of mothers raising preschoolers in snowy cold region. We conducted a questionnaire survey in snow season in Sapporo city. The free description written in the questionnaire of 80 mothers were analyzed from two points of view. The one point was the mothers' difficulty in child-rearing and the other was the mothers' desire of social support for child rearing.

There were three categories composing of the mothers' difficulty and four categories composing of the mothers' desire of social support. The former composition was "Lacking of the playgrounds for children", "The difficult life to live with children", and "Lacking of the organization to leave their children". And the latter was "The enough place and chance for children to play", "The system for children to be left anytime", "The place and peer supporting for child-rearing" and "Environment for child-rearing"

This study revealed that the lacking in children's playgrounds leads to difficulty with go outside especially in snow season. The results suggest that both the places and opportunities to play and interact another family are important.

I. はじめに

近年、少子化や核家族化により子どもに接する機会がないまま親になる人が増えており、それらが育児に対する不安や、育児困難感を増加させる一因となっている。このような背景を受け、2001年に始まった母子の健康水準向上のための国民運動計画「健やか親子 21」⁽¹⁾では、主要課題の1つに「育児不安の軽減」を挙げ、育児不安対策が取り組まれてきた。引き続く2015年からの「健やか親子 21 (第2次)」⁽²⁾でも、基盤課題の1つに「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」を挙げ、親子を孤立させない地域作りを目標としてい

る。

0～2歳の子どもを持つ母親を対象とした大規模調査⁽³⁾によると、母親が自信をもって前向きに子育てができるようになるには、地域社会の支援制度の充実と関連することが示されている。幼い子どもを抱える母親にとって、地域の育児支援の充実は、親子が健やかに過ごすために不可欠といえる。

しかし、行政をはじめ、医療機関や学校など様々な機関が、育児支援施策を展開しているが、地域の育児事情に合わせた細やかな支援を提供するには至っていないのが現状である。

* 北海道科学大学保健医療学部看護学科

** 北海道科学大学工学部都市環境学科

*** 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科

北海道札幌市は全国でも有数の豪雪地帯であり、冬には 4 ヶ月程度積雪が持続するため、夏季と冬季の生活状況は大きく異なる。そのことは、育児にも影響すると考えられ、積雪寒冷地特有の育児支援ニーズがあることが予測されるが、積雪寒冷地の育児に焦点を当てた研究報告はほとんど無い。

II. 目的

積雪寒冷地に居住する母親の育児支援ニーズを明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象者

積雪寒冷地である北海道札幌市に居住し、乳幼児を養育する母親

2. 調査期間

積雪期である冬季に行い、2015 年 1 月 9 日～3 月 9 日に実施した。

3. 調査方法

本研究は、「積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の QOL と育児状況に関する実態調査」の一部として行った。この調査は、母親の QOL と影響要因、育児状況について、積雪寒冷期と非積雪寒冷期の実態を明らかにするために、同一の自記式質問紙を用いて夏季と冬季の 2 期に実施した。本研究は冬季に実施した調査結果の一部を用いた。

札幌市で行われている 1 歳 6 ヶ月児健康診査及び 3 歳児健康診査と、研究者らが大学で開催している子育て支援プログラムに訪れた母親に無記名自記式質問紙調査の目的、方法を説明し、協力の意思を確認した後、質問紙配布の同意が得られた者に対し、質問紙を手渡しで配布し、回収箱を設置して回収した。

4. 調査内容

「積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の QOL と育児状況に関する実態調査」の質問紙は以下の内容で構成した。本研究において結果として扱ったのは「対象者の属性」と「自由記述」である。

1) 対象者の属性

年齢、就労状況、子どもの数、居住状況、世帯年収

2) 乳幼児を養育する母親の QOL

WHO が開発し、信頼性・妥当性の検証がされ販売されている QOL 測定尺度 WHOQOL 26 (日本語版) を使用した。

3) QOL への影響要因

「部屋の広さ」「配偶者の育児状況」「育児観」等 QOL に影響すると考えられる事柄について、研究者等が質問項目を作成し、過去 2 週間の状況について選択式で回答を求めた。

4) 自由記述

「札幌での育児や育児支援について感じていること (こんな育児支援が欲しい、育児のこんなことに困っている等) について」と題し、自由記述で回答を求めた。

5. 分析方法

「積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の QOL と育児状況に関する実態調査」を実施した質問紙は、461 部配布し、450 部回収し (回収率 97.6%) 有効回答は 420 部 (有効回答率 91.1%) であった。そのうち自由記載欄への回答がされている 80 名を本研究の分析対象者とした。

対象者 80 名の属性については、単純集計を行った。自由記載欄に書かれた文章は、積雪寒冷期に回答した内容であることから、積雪寒冷期に感じていることとして扱った。記載されている内容のうち、「育児に関して困っていること」と、「希望する育児支援内容」について表されているものを、それぞれ文脈単位で抽出し、コード化した。続いて、類似した内容をサブカテゴリー (以下 [] で示す)、カテゴリー (以下 【 】 で示す) へと集約した。分析は、共同研究者複数で行い、信頼性・妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究は、北海道科学大学倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号第 6 4 号)。対象者には、調査は調査場所の業務と無関係であり回答は強制するものではなく自由意思であること、回答しない場合も不利益は生じないこと、無記名の自記式調査であること、個人が特定されないことを、口頭及び文書で説明した。協力の意思を確認し、質問紙配布の同意が得られた者に対してのみ質問紙を配布し、質問紙の回収を持って同意が得られたものと判断した。

IV. 結果

1. 対象者の概要

分析対象者である母親 80 名の平均年齢は、 35.3 ± 4.8 歳で、平均子ども数は 1.6 ± 0.6 人であった。就労状況は、無職が 47 名 (58.8%)、パー

ト・アルバイトが 11 名 (13.8%)、フルタイムが 22 名 (27.5%) であった。居住形態は、無回答 1 名を除き、一戸建て 21 名 (26.6%)、集合住宅 58 名 (73.4%)、自宅の広さは無回答 33 名を除き 90 m²以上 9 名 (19.1%)、70～90 m²未満 10 名 (21.3%)、50～70 m²未満 23 名 (48.9%)、50 m²未満 5 名 (10.6%) であった。世帯年収は、無回答 1 名を除き、700 万以上 21 名 (26.6%)、500～700 万未満 23 名、300～500 万未満 23 名 (29.1%)、300 万未満 11 名 (13.9%)、分からない・答えたくない 1 名 (1.3%) であった。

2. 育児の実態と育児支援ニーズ

1) 積雪寒冷期に「育児に関して困っていること」

研究対象者から出された「育児に関して困っていること」には、【子どもの遊び場の不足】【子どもを抱えた生活の大変さ】【子どもの預け先の不足】の 3 つの категорияがあり、13 のサブカテゴリーと 53 のコードからなりたっていた。カテゴリー、

サブカテゴリーを表 1 に示す。

母親達は、育児に困っていることとして、公園や子育て支援センター等の【子どもの遊び場の数・利用時間が不足している】ことや、小さな子どもは冬場に外遊びすることが難しく、室内の遊び場も身近にない等の【冬場の子どもの遊び場が不足している】という【子どもの遊び場の不足】を挙げていた。

子どもとの生活面では、【子どもを抱えた生活の大変さ】として【育児中の人間関係に悩んでいる】【育児と生活のストレスが大きい】【家族や友人の助けがないと育児が大変である】【育児にお金がかかる】という育児の大変さを実感していた。また、冬場は特に【子どもを抱えての移動が大変である】ことや、無料施設が少なくお金をかけないと遊べないために家にこもりがちになり【外との交流を持つことができていない】、【子どもが出す物音に気を遣う】という大変さも実感していた。

表 1 積雪寒冷期に「育児に関して困っていること」

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
子どもの遊び場の不足	子どもの遊び場の数・利用時間が不足している	子育て支援センターの利用時間が短い・子育てサロンが少ない・公園が少ない
	冬場の子どもの遊び場が不足している	冬場は公園が利用できない・冬場は無料で遊べる屋内施設が少ない
子どもを抱えた生活の大変さ	育児中の人間関係に悩んでいる	ママ友との人間関係が面倒である・同居家族と子育ての違いに悩んでいる
	育児と生活のストレスが大きい	育児と生活のストレスが大きい
	家族や友人の助けがないと育児が大変である	育児仲間がいなければ辛かったと思う・家族のサポートが得られず育児が大変である
	外との交流を持つことができていない	他の子と交流させたいができていない・冬場はお金をかけないと遊べないので家にこもりがちになる・冬場は移動手段が限られるので外出の機会が減っている
	育児にお金がかかる	教育費がかかる・子どもにお金がかかる
	子どもを抱えての移動が大変である	冬場は子どもを抱っこして雪道を歩くのが怖い・冬場は雪で歩道がなくて困る・
	子どもが出す物音に気を遣う	子どもが出す音に気を遣う・子どもが泣くと近所に気を遣う
子どもの預け先の不足	希望している保育園への入園が難しい	認可保育園に入園できない・家の近くの保育園に入園できない・兄弟同じ保育園に通わせられない
	求職中の保育園への入園が難しい	求職中は認可保育園に入園できない・求職中は保育園探しが難しい
	病児保育が不足している	病児保育の枠が少なく利用できない・子どもが病気の時に預ける施設がない
	一時保育を利用しづらい	急に利用できない・料金が安い・託児が少ない

また、倍率が高くて認可保育園に入れない等の
[希望している保育園への入園が難しい]、[求職中の保育園へ入園が難しい]、働いている母親にとって子どもが病気をした際に必要な[病児保育が不足している]、働いていない母親が緊急時や息抜きに利用したいが料金が高いことや保育枠が不足していることによる[一時保育を利用しづらい]といった【子どもの預け先の不足】にも困っていた。

2) 積雪寒冷期に「希望する育児支援内容」

希望する育児支援内容には、【子どもが遊ぶことのできる場や機会】【子どもを預けたいときに預けられる体制】【育児を支えてもらえる場や仲間】【育児環境の整備】があり、17のサブカテゴリーと67のコードからなりたっていた(表2)。

【子どもが遊ぶことのできる場や機会】には、大きく6つの内容が挙げられていた。まず、[これま

表2 積雪寒冷期に「希望する育児支援内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
子どもが遊ぶことのできる場や機会	これまである子どもの遊び場の利用時間の拡大	子育て支援センターを土日にも利用できるとよい・終日利用できるとよい
	子どもが参加できるイベント	親子で参加できるイベントを増やしてほしい・学びながら楽しめるイベントがほしい
	子どもが身体を動かす機会	大学生による子どもの運動教室があるとよい・楽しく外遊びできる機会がほしい
	無料で利用できる屋内施設	無料で遊べる室内施設がほしい・保育施設を開放してほしい・体育館を無料開放してほしい
	駅周辺の子どもの遊び場	駅周辺に子どもの遊び場がほしい・冬場は駅近くで子育てサロンをしてほしい
	小さな子ども専用の遊び場	3歳以下に限定した遊び場がほしい・未就学児の遊べる場所がほしい
子どもを預けたいときに預けられる体制	希望する保育園への入園	希望する保育園に入れるようにしてほしい・保育園の数を増やしてほしい
	利用しやすい一時保育	急な場合も預かってほしい・一時保育の利用料金を下げてほしい・気軽に子どもを預けられる場がほしい
	自宅での託児サービス	冬場に自宅で託児してもらえるサービスがほしい
	いつでも利用できる病児保育	病児保育を増やしてほしい・子どもが病気の時に支援がほしい
	学童の整備	全小学校に学童をおいてほしい
育児を支えてもらえる場や仲間	育児相談できる機関	育児相談できる機関がほしい・身近に相談できる場所がほしい
	育児を助け合う人間関係を築くための支援	近所の人と交流できる機会がほしい・地域で育児をサポートしてもらえる体制がほしい・子どもが参加できる地域の行事がほしい
	同じ状況にある母親が集える機会	同じ不安を抱えた母親と話せる機会がほしい・就労している母親が集まれる機会がほしい
育児環境の整備	育児に関する情報	身近な施設で子育て講習会を開いてほしい・保育園情報を得やすくしてほしい
	子育て世帯への金銭的支援	多子世帯への減額サービスがほしい・タクシー代の割引をしてほしい・予防接種等を公費負担にしてほしい
	子どもを連れて行動しやすい環境	ベビーカー置き場を作してほしい・施設内に子どもが待てる場を作してほしい

である子どもの遊び場の利用時間の拡大]である。札幌市には親子が自由に無料参加できる「子育てサロン」という催しが地域の児童館や子育て支援センター等の公共機関で定期的に行われているが、利用時間が平日の一定時間に限られているため、利用時間を拡大してほしい、土日にも利用したい等の意見が出されていた。また、[子どもが参加できるイベント]を増やしてほしい、[子どもが身体を動かす機会]を増やしてほしいという希望や[小さな子ども専用の遊び場]を増やしてほしいという希望も挙げていた。その他に、冬季に外遊びが難しくなることから冬に無料で遊べる室内施設がほしい、保育施設や体育館を開放してほしい等の[無料で利用できる屋内施設]の要望や、特に冬は地下鉄から近い場所で子育てサロンをしてほしい、駅周辺に室内公園を設けてほしいという[駅周辺に子どもが遊び場]への要望も挙げていた。

【子どもを預けたいときに預けられる体制】は、希望者全員が保育園に入れるようにしてほしい、認可保育園を増やしてほしい等といった[希望する保育園への入園]や、急な場合の預かりや、利用料金を下げる等[利用しやすい一時保育]への要望、就労する母親が切望している[いつでも利用できる病児保育]という内容であった。また、外に出られない冬場は特に[自宅での託児サービス]を望んでいた。子どもが就学した後を見据えて、すべての小学校区に[学童の整備]をすることも希望していた。

また、気軽に[育児相談できる機関]や、同じ不安を抱えた母親が話せるような[同じ状況にある母親が集える機会]、地域の人と交流できる行事や育児をサポートしてもらえる体制など[育児を助け合う人間関係を築くための支援]という【育児をささえてもらえる場や仲間】の存在も希望していた。

その他、子育て講習会の開催や保育園情報など[育児に関する情報]を得やすくしてほしいという希望や、多子世帯への減額サービスや幼稚園料等の公費負担など[子育て世帯への金銭的支援]、公共の場などを[子どもを連れて行動しやすい環境]にしてほしいという【育児環境の整備】への要望も挙げられていた。

V. 考察

札幌市では、11月頃から3月頃にかけて降雪が

あり、この期間に公園の遊具で遊ぶ、走るなど、夏季と同様の外遊びをすることが難しくなる。11月の終わりから12月中旬にかけての雪の降り始めの時期は、寒さのため外出を控えるようになり、子どもの外遊びの機会は減少する。一方、12月から3月初めまでの時期は多量の積雪があり、子どもにとっては雪遊びができる時期である。しかし小さな子どもにとって、氷点下の屋外での雪遊びは、出来ても短時間に留まる。また、3月から4月にかけては寒さが緩むものの、雪解けのために雪遊びは難しく、この時期も十分に外遊びできていない状況がある。本研究の対象者からも、冬場に子どもを遊ばせる場所が少なく困っていることが多く記述されている。

一方、本研究において、親たちは子どもの出す物音に気を遣っている実態があることも明らかになった。札幌市は人口195万⁽⁴⁾の大都市であり、本研究対象の7割が集合住宅に居住していたことから、多くの親子が物音に気遣って暮らしていることが推測される。また、本研究結果では、体育館の無料開放や無料遊び場の増設など屋内の遊び場の要望も記述されており、母親達は屋内施設が不足し、冬季に子どもが十分に身体を動かして遊ぶことが難しい環境の改善を求めている。

さらに本調査において、「冬場は子どもを抱っこして雪道を歩くのが怖い」、「子どもを抱えての移動が大変である」と母親達が感じていることも明らかになった。外出のしにくさにより、親子が他者と交流する機会が減少していることが考えられる。子どもが遊ぶというのは、単に身体を動かす機会があるという意味だけでない。原田⁽⁵⁾が兵庫県で行った調査によると、1歳6ヶ月健診で「同年代の遊び相手」がいる子どもの発達がはっきり良いという結果が出ており、3歳児健診ではより明確に相関があらわれていると報告されている。他の子どもとの交流は子どもの発達の面からも重要であるといえる。

また、母親にとっても育児中に他者と交流する意義は大きい。馬場ら⁽⁶⁾が東京都に住む生後3~4ヶ月の乳児を持つ母親の「孤独感」を調査した結果によると、妊娠・出産・育児を通じてできた「ママ友達」がいない母親は、いる母親より孤独感が有意に高いと報告されている。さらに孤独感の関連要因を調査した他の研究⁽⁷⁾においても、孤独感の高い者は育児仲間が少ないことが示されている。孤

独感には性格傾向等様々な要因が関連することも示されているが、育児仲間の存在は母親の精神面に影響を与えることが分かる。

さらに、育児不安という観点からみると、河野ら⁽⁸⁾が育児不安に影響する要因を調査した結果、育児不安の高い群は、家庭外での活動に参加しているものの割合が低く、育児の相談相手がいるものの割合が低いことも明らかにされている。これらのことから、一日中、家の中にこもって親子で過ごすより、他の親子と出会える場で過ごせることの方が、母親の精神面に良いと考えられる。冬季に遊び場が不足し他者と交流の機会が減っていることは、積雪寒冷地での育児の課題の1つと言える。

子どもの遊び場が冬場に特に不足している現状を改善するためには、子どもが遊ぶことのできる場や機会を増やすことが必要である。

まず、屋内の遊び場を増やすことが挙げられる。無料で利用できる屋内施設の新設は難しくても、母親達の要望にあったように保育施設や体育館の無料開放など、既に存在する施設を利用出来れば遊び場不足の解消に役立つと考える。また、児童館等で開催されている「子育てサロン」の開催時間を増やすなど、利用時間を広げることもよい。親子が、自宅に近い場所を選んで出かけることが可能となり、冬季でも足を運びやすくなると考える。

さらに、大学や小中高等学校が親子を学校に招くシステムがあるとよい。本調査で得られた母親の意見に「大学で学生と子どもの運動教室があると良い」という内容があった。このような試みが実現すれば、子どもにとって、身体を動かすことができるだけでなく、同世代や異世代との交流の機会にもなる。親にとっては、同世代の子どもを持つ親との交流の機会にもなる。

次に、外遊びの機会を増やす必要もある。「屋外のイベントを増やし、外での遊びが楽しくできるとよい」という意見も出されており、楽しく冬遊びを体験できるイベントがあれば、寒い屋外でも親子で楽しむことが可能かもしれない。北海道の小中学生の体力は男女ともに全国平均点を下回る⁽⁹⁾ことが分かり、将来的な体力向上の観点からも、幼児期から身体を動かす楽しさを感じられるような取組みがあると良いと考える。

また、親子が居住地域で人間関係を築き、交流することも必要である。本調査において「近所の人と交流できる機会がほしい」との要望が明らかにな

った。町内会主催の行事に親子で参加する、地域で積極的に交流する、普段から育児を支え合える仲間を作るなどし、母親自身が近隣の人たちと関係を作っていくという意識を持つことが重要なことである。

VI. 結論

乳幼児を養育している母親を対象に、育児や育児支援について感じていることについて、冬季に調査を行い分析した結果、以下の結論を得た。

1. 育児に困っていることとして【子どもの遊び場の不足】【子どもを抱えた生活の大変さ】【子どもの預け先の不足】が挙げられた。
2. 希望する育児支援内容は【子どもが遊ぶことのできる場や機会】【子どもを預けたいときに預けられる体制】【育児を支えてもらえる場や仲間】【育児環境の整備】であった。
3. 冬季に特に特徴的な内容として、積雪による子どもの遊び場の不足と、外出のし辛さがあった。子どもが遊ぶことのできる場や機会を設けると、親子が他者と交流する機会を持つことができると、支援することの重要性が示唆された。

（謝辞：本調査にご協力いただきました対象の皆様、保健センター職員の皆様に感謝申し上げます。）

（本研究は平成 26～27 年度北海道科学大学競争的研究費の助成を受けて実施した。）

引用文献

- (1) 厚生労働省.「健やか親子 21」最終評価報告書.
<<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11908000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Boshihokenka/00000>> (2016/01/29)
- (2) 厚生労働省・健やか親子 21 推進協議会. 健やか親子 21 (第 2 次).
<<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf>> (2016/01/29)
- (3) 松本聡子. 子育て環境と社会的な子育て支援制度. ベネッセ次世代育成研究室編, 第 2 回妊娠出産子育て基本調査報告書, ベネッセ教育総合研究所, 2011, pp. 88-103.
- (4) 札幌市. 札幌市人口統計.
<<http://www.city.sapporo.jp/toukei/jinko/jinko.html>> (2016/02/26)

- (5) 原田正文. 子育ての変貌と次世代育成支援 兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防. 愛知県, 名古屋大学出版会, 2006.
- (6) 馬場 千恵, 村山 洋史, 田口 敦子, 他. 乳児を持つ母親の孤独感と社会との関連について 家族や友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート. 日本公衆衛生雑誌. 2013, 60 (12), pp. 727-737.
- (7) 佐藤 美樹, 田高 悦子, 有本 梓. 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 乳幼児の年齢集団別の検討. 日本公衆衛生雑誌. 2014, 61 (3), pp. 121-129.
- (8) 河野 古都絵, 大井 伸子. 3歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因についての検討. 母性衛生. 2014, 55 (1), pp. 102-110.
- (9) 北海道教育委員会. 平成27年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 調査結果のポイントについて 北海道（公立）における調査結果. <<http://www.dokyo.i.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ktk/grp/08/H27point1.pdf>> (2016/02/29)